

## カメレオン作曲家 イーゴリ・ストラヴィンスキー

担当 菊池

ストラヴィンスキーは「カメレオン作曲家」と呼ばれています。ロシアのペテルスブルグ出身（1882年生）で、大学で法律を学ぶと同時に「リムスキー＝コルサコフ」に師事していました。やがてバレエ興行師のディアギレフに認められてバレエ曲を作曲します。《火の鳥》（1910年）《ペトルーシカ》（1911年）と成功を収めて行きます。そうして問題の《春の祭典》（1913年）がシャンゼリゼ劇場の舞台にかかります。

春の祭典（バレエ曲）は異教徒（架空）たちが春を讃える祭りで、前半は大地への崇敬、後半は生け贄を献げる。大編成のオーケストラが変拍子で疾走するブラス・ロック・バンドの様なサウンドに当時の観客は驚愕する共に、これはバレエでは無い、音楽では無い、たちまちシャンゼリゼ劇場が大騒動となったそうです。

春の祭典はストラヴィンスキー一人で作曲したのでは無く、コラボレーションで出来上がったのです。

セルゲイ・ディアギレフ ⇒総監督（渉外担当）

イゴール・ストラヴィンスキー ⇒音楽担当

ヴァツラフ・ニジンスキー ⇒バレエ振り付け担当

ニコライ・レーリツ ⇒台本・背景画・衣装担当

日本では「ハルサイ」とも言われていますが、日本人が感じているような祭りでは無く、古代の土俗的で（シャーマニズム的）神聖な宗教儀式と捉えるべきだと思います。この曲が、まさにロマン時代を終わらせた曲ともありますが、今聞いて見るとさほど当時の聴衆と違って驚くことはありません。かえって楽しんで（オーディオ装置の確認にも）聴いてしまうのは私だけでしょうか。

彼がカメレオン作曲家と言われるのは生まれた19世紀は「論争」「革命」と「戦争」の時代で、まさにロマン派も末期にありました。《春の祭典》の舞台の翌年1914年には世界大戦が勃発しています。彼はロシアからフランスへ移転しながら曲も変化して行きます。最後はナチから逃れるためにアメリカに移住します。アメリカ好みの曲も作曲していますが、後期は「ロシア正教」に帰依した曲も多い。

印象主義 《花火》

原始主義 《火の鳥》《ペトルーシカ》《春の祭典》（日本では「はるさい」ともいう）

新古典主義 《プルチネッタ》《エディプス王》《詩編交響曲》

十二音技法 《レクイエム・カンティクルス》《アゴン》

1959年には日本にも来て、N響を指揮（チェレスタを黛敏郎、タンバリンを岩城宏之）、若手の武満徹を見だし世界に紹介した。キューバ危機（1962年）の際には祖国を離れてはじめてソ連を訪問し、《J.F.ケネディへの悲歌》（1964年）などを作曲しています。

## 春の祭典（作曲 1913 年）・・・・生と死

●アンタル・ドラティ指揮 デトロイト交響楽団 1982 年

### 第一部●大地への崇敬 「生」の世界

- |                 |                      |
|-----------------|----------------------|
| 米 春の兆し 若い女たちの踊り | 管楽器の特徴的なアクセント        |
| 米 誘惑の儀式         | ギクシャクとした変拍子          |
| 米 春の Rond（輪）    | 民謡旋律だけど重々しい          |
| 米 競い合う部族の儀式     | 2 台のティンパニー           |
| 米 賢者の行進         | オーケストラの各パートが異なる拍子で演奏 |
| 米 賢者の口づけ        | たったの 4 小節            |
| 米 大地の踊り         | 大太鼓・シンバルたちが大地の目覚めを表す |

### 第二部●いけにえ 「死」の世界

- |                |   |
|----------------|---|
| 米 若い娘たちの神秘的な集い | ・ヴィオラの 6 重奏は恐れる若い娘たちの心像<br>・ホルンが生け贄の娘が決まる。……最後の審判 |
| 米 選ばれた乙女への賛美   | めまぐるしい変拍子   |
| 米 祖先の儀式        | タンバリンと低音楽器<br>(まさにシャーマニズム)                        |
| 米 いけにえの踊り      | 不調和音と不規則リズム<br>最後の一打は乙女の生命がつきた                    |

シャーマン（巫女のような）がトランス状態となり、肉体から魂が離れ天上・冥界と交信する

## 3 楽章の交響曲（作曲 1942-1945 年）

米 オットー・クレンペラー フィルハーモニア交響楽団